巡回ワークショップ　@気仙沼市・大島

備蓄・共助 大切さ再認識

災害に強い島づくり

―むすび塾―

第6回「むすび塾」は9月30日、気仙沼市・大島の大島開発総合センターで開いた。島は東日本大震災の揺れと大津波の影響で、電気や水道の供給が止まり、市街地側と結ぶ定期航路も長期間運休した。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長が進行役を務め、要害地区の住民9人と避難行動や島の孤立状態を振り返りながら、災害に強い島づくりに何が必要かを確認した。

◇

震災発生直後、参加者のほとんどが20分以内に避難を始めていた。地区では年2回、避難訓練を実施していて、「『揺れたら逃げる』という意識が浸透していた」との意見が出た。参加者は日ごろの訓練の重要性をあらためて実感した。ただ、震災後は訓練を行っていないという。

高齢で体の不自由な母親を乗せるなど、自動車で避難した参加者は2人いた。島内の車の所有者の多くは日中、市内に働きに出ているため、渋滞は起きなかった。「帰宅している時間帯だったらどうなっただろう」と心配する声も上がった。

関心が集中したのがライフラインで、今回のように長い期間途絶したのは、誰もが初めての経験だった。

水の確保に役立ったのは、水道敷設前はどの家にもあった井戸だった。普段から畑の水まきなどに使っている家もあり、停電で動かないポンプの代わりにロープを結び付けたバケツでくみ上げ、隣近所で分け合ってしのいだ。その際、リヤカーや一輪車が重宝したという。

食料に関しては、離島という環境から備蓄する習慣が根付いていた。大量のコメを玄米で保管したり、「ストッカー」と呼ばれる冷凍庫に海産物を保存したりしていた。水と同様に知人らにおすそ分けして助け合ったといい、参加者は備蓄とともに地域に残る絆の大切さを再認識した。

震災発生の翌日から、島民を不安に陥れたのは大規模な山林火災だった。島民は男性を中心に、がれきをどけて防火帯づくりを行う作業に取り組み、住宅地への延焼を食い止めた。

大島では山火事が度々起きていたが、島民総出で協力して消火活動に当たったことはこれまでになかった。

大島でも人口の減少と高齢化が進み、日中は一人きりのお年寄りも多い。発生当日は、近所に声を掛け、何人か連れ立って行動した住民がいた。人数が多い方が安心でき、情報が入りやすいとの意見もあった。

木村理事長は「ばらばらに逃げる『津波てんでんこ』は理念としては正しいが、高齢者や障害者のように1人で逃げられない人をどうするか、普段から考えておく必要がある」と指摘した。

巡回ワークショップ
むすび塾
むすび塾
むすび塾

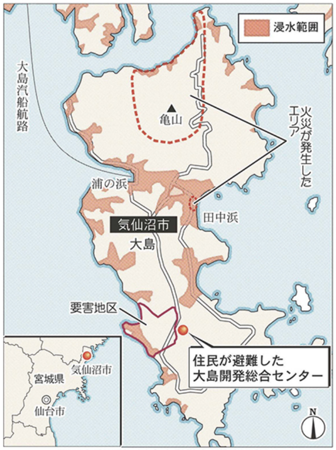
震災発生当日の避難の様子を確認した後、離島で必要な備えについて意見を交わす参加者＝９月30日、気仙沼市中山の大島開発総合センター

震災で水道が止まった際、村上亮一さんは井戸で生活用水を確保した＝９月30日、気仙沼市中山

東日本大震災の教訓を生かし、次の地震・津波に備えるため、河北新報社はことし4月、「いのちと地域を守る」をテーマに、防災・減災のページを新設し、毎月11日に掲載してきました。

10月からは、地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を2㌻に増やし、震災発生時の出来事と、その後の取り組みなどを紹介する各コーナーと合わせて3㌻に拡大します。

死者・不明者31人 家屋全壊775棟



※国土地理院、日本火災学会の資料を加工

大島の被害

大島は気仙沼湾に浮かぶ東北最大の有人の離島で、9・05平方㌔に1093世帯3009人（8月末現在）が暮らす。

市などによると、昨年3月11日の東日本大震災で市内は最大震度6弱を記録。大島では、太平洋側と内湾側から押し寄せた津波が田中浜—浦の浜（幅約1㌔）のラインでぶつかり、島が二分された。死者・行方不明者は31人に上り、被災家屋は全壊775棟を含め島全体の36・5％に当たる1366棟に及んだ。

津波によって、市内から大島に渡る大島汽船所有のフェリーなど全7隻が使用不能となり、島は一時孤立した。電気、水道も断絶した。

3月12日午後11時ごろには気仙沼湾で発生した

航路使用不能で孤立 電気水道断絶

海上火災が飛び火し、亀山（235㍍）の山林など広範囲に延焼。断水の中、総出の消火活動を行い、17日午前11時3分に鎮火した。火災による人的被害はなかった。

航路は3月15日に個人運航による臨時連絡船がスタート。大島汽船は、同30日に旅客船、4月27日にカーフェリーによる定期便をそれぞれ復活させた。電気、水道は5月上旬までに復旧した。

要害地区は大島南部の気仙沼湾に面した88世帯の集落。津波により18戸が全半壊した。地区住民は避難場所の大島開発総合センターなどに避難し、島内での犠牲者はなかったが、市街地側や漁に出ていた2人が死亡・行方不明になった。

続く余震 先入観捨て対応を

太平洋プレート（岩板）は東北地方の東側の海溝で陸側プレートの下に年８㌢ずつ沈み込んでいる。髪の毛が伸びる速さとほぼ同じだが、数十年から数百年かけてゆがみが蓄積されている。

地震は、地殻のゆがみが解放される時に起こる。規模は断層が滑った面積や長さに応じて大きくなる。東日本大震災のマグニチュード（Ｍ）9.0は、東北地方ほどの面積が10㍍滑る計算になる。実際に震源は岩手県沖から茨城県沖までの長さ500㌔、幅200㌔だった。

この断層の滑りによって陸側プレートがはね上がり、津波が生じた。余震は今後も数年から数十年かけて続き、Ｍ８が起きても不思議ではない。

今回のようなプレート境界の地震後には、日本海溝よりも沖合を震源とする「アウターライズ地震」が起きる恐れがある。高い津波が来る可能性があり、ゆっくりとした揺れが長時間続くときは、特に注意が必要だ。

地震が起こったら、ラジオなどの情報に注意してほしい。津波が到達するまで１時間以上かかる時もあり、先入観を持たずに対応すべきだ。

■専門家から　東北大地震・噴火予知研究観測センター教授　**松沢暢さん**